

富士山麓の植物Ⅱ

——水ヶ塚周辺——



裾野市教育委員会
裾野市立富士山資料館

発刊のことば

裾野市教育委員会 教育長 芹澤 仁

さきに富士山資料館では、富士山麓の植物Ⅰ—十里木高原・大野原—を刊行し、ここに生育する植物群の特性や、花の美しさを保つ基本情報を提供し多くの皆様から御好評をいただいたところであります。

このたび更に富士山麓の植物Ⅱ—水ヶ塚周辺—を発刊する運びとなりました。このたびの発刊に際し調査執筆・写真取材調査に当てられた皆様の御尽力に、深甚なる敬意を表し感謝を申し上げます。

今は私共の周辺では、環境破壊や資源枯渇の問題が様々に論じられております。当然のことながら私達人間は長い間この自然とのかかわりをもって生きて参りました。そしてこの自然から様々の教訓を得て生きてきたことも事実です。又人々は万葉の昔から野の花に想いを託し、詩心を培い大自然の摂理の不思議さを感じとって生きて参りました。

そして名もない野草の名を覚え、生育の場を知り、花の美しさに感銘し、種と繁殖の実態を見つめることにより、生命の神秘さに感動させられたものでした。

このように私達は自然の中から生きるよろこびと共に、自然の厳しさを学び続けて参りました。

私達はこのかけがえのない自然を大切に保護し、豊かに生きる力を養いつつ、子孫に伝えていく義務があります。

「自然は自ら人間に語りかけはしない。人間が自然に語りかけるか、心を傾けて聞こうとした時語り出す。」と申されております。一見遠回りのようですが、自然の諸々を客観的に観察し、記録する地味な努力が求められております。富士山麓の植物Ⅱの発刊により、私たち身のまわりの自然を厳しく見つめ直し、自然への語りかけの心を育てていただくことを強く期待いたし、発刊のことばといたします。

「水ヶ塚の思い出」—序文にかえて—

裾野市立富士山資料館 館長 渡辺 徳逸

富士山は年間20億トンの降水量があるというのに、富士登山する誰もが飲料水には難渋するのは富士山の地質的構成が水の浸透性が強く表流水皆無のためである。富士山の1,500mに位置する水ヶ塚が僅か日量200トン内外の湧水なのに、富士宮2合目、吉田口泉瑞と共に著名な所以もここにある。

水ヶ塚湧水は古来水利に乏しい須山村のかけがえのない水源だが、富士山と駿河湾も展望される景勝地なため、色々な開発計画があった。徳川時代領主小田原侯の許可を得て、須山の名主勝田三平翁が経木を造り、馬によって搬出のため造った三平横道（現富士山スカイラインの前身）の基地は水ヶ塚だった。明治39年には沼津営林署の詰所が設置された。昭和に至っては上田人丸氏の高原都市計画、松本君平氏の日本青年教団本部、緒明圭造氏の富士登山ケーブルカー施設、富士山国立公園山腹中心施設地等、その基地として囑望されていた。現在は日本ランド遊園地や別荘地、富士山スカイライン駐車場、御殿庭宝永火口へのハイキングコース、桧丸尾遊歩道、三島須山口登山道等、富士山観光の一大基地をなしているが終戦後の昭和30年頃までの三平横道沿線辺りのブナの原始林は素晴らしかった。元沼津営林署員だった高木亨氏は、昼なお暗い原始林で若い署員は怖がったくらいだったが、戦後の復興のため彼処も此処もと伐採されたと話しておられた。私は特にブナ帯の若葉を洩れる強い陽光を浴びながら又、落葉を踏み爽快さに心をひかれて度々訪れた。牧野富太郎先生から公表するなよ。内緒に大切に保存しないと乱獲されて皆無になる。と、いわれた純白のアツモリ草を訪ねて、三平翁の宗家に当たる当時東京都立中学生だった勝田甫君をともなって十里木高原から東臼塚、天照教辺りを幾度も歩き廻った。奈良の東大寺・京都の妙心寺等幾多の大建築に使われたと伝う富士山の櫛の群落の見事さ、二人で手をつなぎ抱きついてみたが、まだまだ幾人か加わらなければ、という程の巨木ばかりだった。付近には優雅な純白なアツモリ草・ゴゼンタチバナ・マイヅル草・サクラ草からキンレイカ等の群落が此処彼処、数々の野鳥の声を聴きながら、こんな理想郷をいつまでもと、念願したがもう桧の植林地と化してしまっている。

富士山は平安の昔から信仰的に更には経済的に、人間関係が広くかつ深く人手が入り過ぎている。特に昭和62年のリゾート法施行で、自然破壊の危機は一入なものがあり、一日の猶予も許されぬ事態を招来した。

戦後必死の努力で経済的にはまずまずの域に達し、更に肉体的・精神的にその歪みを健全に復さんと、日本の象徴富士山の自然を中心に歩行運動を始め、あらゆる方が考えられている昨今、只々感慨無量である。

目 次

発刊のこぼ

裾野市教育委員会教育長 芹澤 仁

序 文

裾野市立富士山資料館館長 渡辺 徳逸

水ヶ塚（ブナ帯）周辺の自然	4
水ヶ塚周辺の植物	11
■ ミツマタ	12
■ クロモジ	12
■ ハタザオ	13
■ メ ギ	14
■ ニワトコ	14
■ ヤマトグサ	15
■ バッコヤナギ	16
■ キジムシロ	16
■ ネコノメソウ	17
■ ツルミヤマシキミ	18
■ ナツグミ	19
■ ワチガイソウ	19
■ シロバナエンレイソウ	20
■ ヤマシャクヤク	21
■ ウワバミソウ	22
■ イヌガラシ	22
■ キンラン	23
■ ヤマウツボ	24
■ ササバギンラン	25
■ クワガタソウ	26
■ ミヤマタニソバ	26

■ コナスビ	27
■ ホオノキ	27
■ マユミ	28
■ ミツバウツギ	28
■ シロバナノヘビイチゴ	29
■ マイヅルソウ	29
■ ヤマトウバナ	30
■ ミヤママタタビ	30
■ タケシマラン	31
■ ツバメオモト	31
■ イワシモツケ	32
■ タニギキョウ	32
■ イチヤクソウ	33
■ オククルマムグラ	34
■ ヒメシャラ	34
■ ズダヤクシュ	35
■ バイケイソウ	36
■ サワギク	37
■ ツルシロカネソウ	38
■ ウツボグサ	39
■ イワセントウソウ	40
■ キバナショウキラン	41
■ ツマトリソウ	42
■ イケマ	42
■ ハコネラン	43
■ タケニグサ	44
■ カワラマツバ	45
■ ウバユリ	46
■ コキンレイカ	47
■ ホソバノキソチドリ	48

■ミヤマムグラ	49
■マルバダケブキ	50
■ホザキイチョウラン	51
■コバノイチヤクソウ	52
■シデシャジン	52
■アオスズラン	53
■レンゲショウマ	54
■ツクバネソウ	54
■タニタデ	55
■コバギボウシ	56
■ミヤマニンジン	57
■ヤマノコギリソウ	58
■ハンゴンソウ	59
■フジオトギリソウ	60
■カニコウモリ	61
■キツリフネ	62
■ルドベッキア	62
■コウモリソウ	63
■フシダロセンノウ	64
■キオン	65
■トモエシオガマ	66
■ナガバノコウヤボウキ	66
■メボタンヅル	67
■ヤマハハコ	67
■ハナイカリ	68
■タチコゴメグサ	69
■ノブキ	70
■モミジガサ	71
■クサコアカソ	72
■ヤブレガサ	72

■シロヨメナ	73
■ヤマミズ	73
■イヌヤマハッカ	74
■アケボノソウ	75
■フユノハナワラビ	76

さくいん	77
あとがき	79

■=草 花
■=つる植物
■=樹 木

本書の利用にあたって

(1) 本書で紹介しております草木は、平成6年早春から晩秋にかけて、水ヶ塚周辺地域において咲くものを写真撮影し、現地を訪れた際に見られる身近な花を中心にとりあげました。

(2) 花の紹介は開花時期の早いものから順にのせておりますが、植物の生育する場所・日当たり等の環境によって開花時期が多少前後することがあります。

また、花期は水ヶ塚周辺にて咲く時期を基本として、紹介しております。

(3) 紹介しております花は、「草木」「つる植物」「樹木」の分類を各色によって区分しております。(色分けは前ページの通りです。)

(4) 花の紹介は、通常の名称にて紹介しております。

また、花の特徴は専門用語は控え、一般にわかりやすい言葉にて表現しました。



東臼塚の原生林

水ヶ塚（ブナ帯）周辺の自然

はじめに

日本一高く美しく、緑豊かな富士山の自然に魅せられて山麓を訪れる人々の姿は、四季を通して絶えることがありません。登山者や観光客だけでなく、多くの人々が、日頃の自分の生活の延長として、富士山の自然を求め、触れ合いを楽しんでいます。

喧騒を離れ、深い原生林や草原に遊ぶとき、木漏れ日に透けて映る新緑の清々しさなどに心が洗われ、可憐に咲く野の草花や、鮮やかな紅葉に心が和みます。

この冊子は、富士山南麓の水ヶ塚周辺、海拔1,000～1,700mのブナ帯とよばれている区域の植物を調査した写真資料集です。

今、富士山の貴重な自然や文化を、世界の遺産として大切に守り育てていこうという気運が高まっています。この冊子が南麓に育つ植物の記録集として、また、富士に学ぶ多くの人々の手引き書として活用されれば幸いです。

1 植物が育つ自然環境

地質の特徴

富士山には山体の一部が噴火してできた寄生火山とよばれる火山が70個以上もあります。これは日本の火山の中では最も多い数にのぼります。

富士山の寄生火山は、山頂を中心に北西から南東に引いた直線に沿って全体の60%が分布し、北東から南西に引いた直線に沿って約20%が分布しています。この2本の線は、溶岩の基であるマグマが地下から上昇してくるのに都合のよい弱線（構造線）とよばれていて、これに沿って噴火が起こりやすいものと考えられています。

水ヶ塚周辺は、山頂から南東方向に引いたこの弱線上にちょうど重なっていて、20個以上もの寄生火山が集中している特殊な地域です。そのため今回の調査範囲の地質は、富士山本体が噴出した火山灰や溶岩を主に、今から3,500～1,000年前に山麓で盛んに小噴火を繰り返すことによって流れ出た、いくつかの寄生火山の溶岩や砂礫がその基盤となっています。

そして、以来1,000年余りの時の経過のなかで、先駆植物の進入によって腐葉土が作られ、それが溶岩を覆い、徐々に水分や養分など増加させ、原生林が形成されてきました。



腰切塚噴火口

気象の特徴

富士山は独立峰で、周囲の山と比べ群を抜いて高い山です。そのため、気流の様々な影響を受けやすいことや、標高の違いによる温度差が大きいという特徴があります。

夏季は、太平洋から駿河湾を渡る湿気を多く含んだ気流が、南麓に多量の雨を降らせます。特に、台風や夏の雷雨時にはシャワーのような激しい降雨があり何本もの沢や、林間からまたたく間に濁流が流れ出すことがしばしば見られます。太郎坊（海拔1,300m）の観測では、年間4,849mmの観測値もあり、これは日本一の降水量地帯として有名な紀伊半島・大台ヶ原の年間降水量と肩を並べるほどです。

冬季は、寒冷で乾燥した強い北西の季節風が連日吹きつけます。降雪量は多くはありませんが、2～3月にかけて毎年50cm程の降雪が数回あります。植物にとっては、冬場の生育環境が特に厳しいものとなります。

2 この地域の植生の特徴

富士山の南～南東斜面の標高1,000～1,700mの植生については、火山噴出物の貧養の地に広がる一大ススキ群落を下部として、標高が増すにつれてクリ、カエデ、ミズナラなどを優占種とする自然林へと続き、さらにヒノキ、ブナ、ウラジロモミ、シラビソ、カラマツなどを中心とする自然林へと変化していきます。



自然林に育つ巨木

標高が異なると温度やその他の気象条件が変化し、その環境に最も適した植生が長い年月の間に形成されていきますが、これが植物の垂直分布とよばれるものであり、高い独立峰である富士山にはそれが明瞭に表れています。

しかし南東～東斜面は、かつて宝永の噴火（1707年）のために一面の砂礫に厚く覆われた歴史があります。また一方で日本経済の急速な発展に伴って製紙原料等々、木材の需要が増大し、伐採・運搬機械の発達も相まって、原生林の大量伐採が急激に進行しました。

現在では、伐採地の自然植生の回復をはかる二次林の区域や、スギ、ヒノキ、カラマツ、ウラジロモミ等、人工植林地などの区域が広がっていて、わずかに残る原生林はとても貴重なものとなっています。

a ススキ草原

平塚、黒塚、次郎右衛門塚、赤塚等の寄生火山の山麓南部は、明治時代からの演習地として現在まで長い間使用されてきました。また、採草地としても管理されていて、毎年早春の頃、広い地域で野焼きが行われています。そのためこの地域一帯は、草原としての景観を保っていますが、ススキ草原内にはウツギ、テリハノイバラ、フジサンシキウツギなどの、低木も含まれています。

b 浅黄塚ヒノキ学術保護林

標高1,500m付近の浅黄塚、腰切塚、東白塚の3つの寄生火山に囲まれた地域は、比較的新しい溶岩を基盤にしていますが、この貧養の溶岩上にヒノキを優占先種とした自然林が発達しています。ヒノキはスギ等比べて根が浅いことと、この地の夏場の雨量と気温が生育に適し、富士山麓としては珍しい群落を作っているものと考えられています。

林間には高木層としてトウヒ、ミズナラ等が生育し、低木層としてアセビ、オオカメノキ、ノリウツギ、ナナカマド、サラサドウダン等が見られます。また、草本層としてキンレイカ、マイヅルソウ等が植生の中心となっています。溶岩上にはコケ類が多く見られます。

c ブナ・ミズナラ林

標高1,400～1,600m付近には林内にスズタケを密生したブナ林が発達しています。土壌の発達した平坦地や比較的ゆるい傾斜地に多く見られます。

林内は明るく、林床は乾燥しています。立地条件が良いため伐採地が多く、現在残っているブナの自然林はとても貴重なものです。

林間にはコミネカエデ、ミズナラ、ヤマボウシ、ウラジロモミ等が混生しています。やや湿地には、サワグルミ、サワシバ等の林が見られます。草本類の種類はスズタケが広く生育しているため少なく、クルマムグラ、ミヤマタニソバ、マイヅルソウ、ヤマトリカブト、ツルシロカネソウ等が見られます。

d ウラジロモミ林

南斜面標高1,600~1,800m付近には、最高木層をウラジロモミとし、オオイタヤメイゲツ、イタヤカエデ、ヒメシャラを含むブナ林が発達しています。ブナが生育している林としては最も標高が高い地域です。

林内には高木層としてトウヒ、コメツガ、シラビソ等が見られます。中間層にはアオダモ、オオカメノキ、ナナカマド、トウゴクミツバツツジ、ツリバナ等が、また、低木層にはミヤマイボタ、ナナカマド等が生育しています。

林内は光の透入が少なく、林床は湿っていますが、土壌は肥沃でマイヅルソウ、コウモリソウ、イワセントウソウ、テンニンソウ等の草本類が多く生育しています。

ウラジロモミ林は、夏緑広葉樹林帯と亜高山性の針葉樹林帯の中間に位置する森林で、これより標高が増すと富士山ではシラビソを優占種とする森林が発達してきます。



東臼塚カエデ林



ヤマシャクヤク

3 この地域の代表的な花

春に咲く花

まだ雪の残る林間に、低木のアセビが壺状の白い花を咲かせます。それに続き、富士山を代表する花の一つであるフジザクラが一斉に咲き出します。うつ向いて咲く可憐な花が冷たい風に揺れ、青空に映えます。日当たりの良い^{かんぼく}灌木の繁みにはミツバツツジが鮮やかな紫色の花で春を伝えます。

気温の上昇につれてミツバアケビが黒紫色の花を、メギが黄色の花をひっそりと咲かせます。

5月、道路脇にはタチツボスミレやタンポポが咲き、モミジイチゴが純白の花をつけます。林間の日当たりの良い所にはミヤマエンレイソウ、イカリソウ、マイヅルソウなどの草本が次々と咲き出します。やがて木々の若芽が急に伸び山麓は日増しに新緑が広がっていきます。

初夏に咲く花

標高の高い樹陰には多年草のツバメオモトが白い小さな花をつけます。湿気を帯びた林内にはゲンノショウコ、サワギクが咲き、独特の姿のバイケイソウが白色の花で人目を引きつけます。荒地にはクマイチゴが白い花を、バッコヤナギが黄色の花を咲かせます。日当たりが良く、開けた所にはシロバナノヘビイチゴが大群落をなし、愛らしい白い花を咲かせます。

木本では、ズミが^{りんご}林檎に似た花を賑やかに咲かせます。梅雨の頃には霧の中にサンショウバラの優雅な花や、白いヤマボウシの幻想的な花が咲き

ます。

盛夏に咲く花

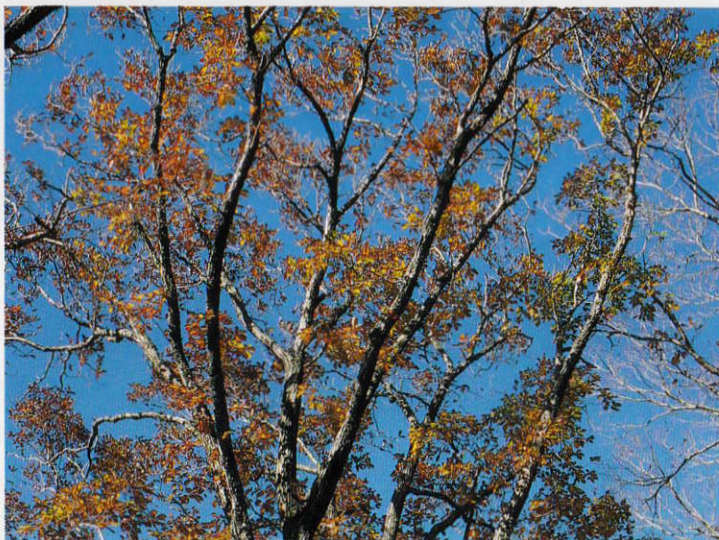
繁みの中に、鋭く太い刺のフジイバラが白い気品のある花を咲かせます。日当たりの良い所には、ヤマホオコ、ハンゴンソウ、キオン、ギボウシ、チダケサシ、フジオトギリ、ヒヨドリバナ、シオガマギク、ホタルブクロ等々の草本が咲きそろいます。

林間には、ツマトリソウ、シロイナモリソウ、クルマムグラ、ミヤマタニソバ、シロカネソウ、テンニンソウ、ツクバネソウ等が地味な花を、ウバユリやマルバダケブキ、キンレイカが個性的な花を咲かせます。

秋に咲く花

コウモリソウ、カニコウモリ、リュウノウギク、ヤマシロギク、ノコンギク等々、きく科の草本類が針葉樹木の中や林の縁に多く見られます。ヤマトリカブト、クサボタンも忘れられない美しい花です。

初秋の針葉樹の林床やブナ林内には、様々な草本類や低木が赤や紫の実をつけます。そして、華やかな紅葉の時期を駆け抜け、長く厳しい冬を迎えることとなります。



ミズナラの紅葉

水ヶ塚周辺の植物



東臼塚火口 盛夏

ミツマタ

(ジンチョウゲ科)

花期 3～4月

樹皮は和紙の原料として使われる。高さ1～2mの落葉低木。枝が3本ずつに分かれるためにこの名がある。葉が出る前に黄色の花をつけるので、早春の林の中でよく目立つ。



クロモジ

(クスノキ科)

花期 4～5月

高さ2～4mの落葉低木。若い枝は緑色で黒い斑点がある。古い部分は暗褐色になる。枝葉に芳香があり、枝はつまようじとして使われる。



ハタザオ

(アブラナ科)

花期 4～6月

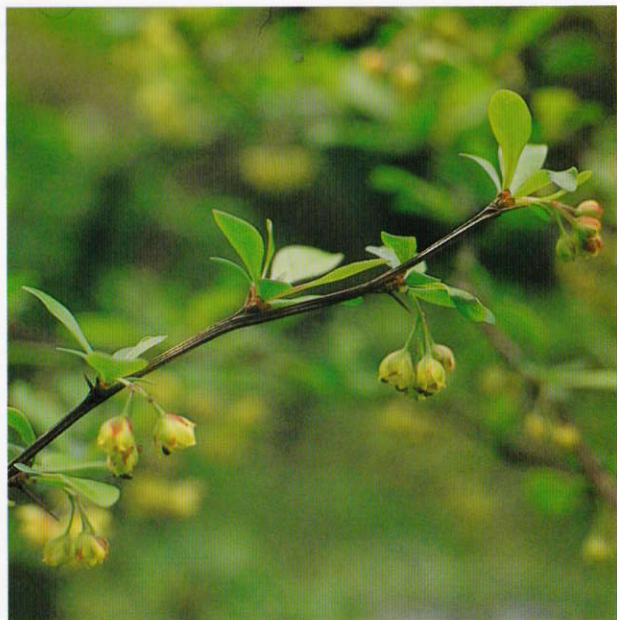
日当たりの良い山野に生える。茎は直立し高さ50～80cmで、葉は白色で毛が多い。花は黄白色の十字状花で下から順に咲く。和名ははたざお旗竿で茎が直立する様子からつけられた。

メギ

(メギ科)

花期 4～5月

山地に生える高さ2mほどの落葉低木。生垣などに植えられ、よく枝分かれしとげがある。花は若葉と同時に下向きに咲く。和名は^{めぎ}目木で、樹皮が眼病に使われたことによる。



ニワトコ

(スイカズラ科)

花期 5～6月

山野に生える、高さ3～6mの落葉低木。花は春、新芽と同時に咲き、果実は7月～8月で赤く熟す。生薬名は^{せつこくぼく}接骨木で、昔の接骨医は接骨治療にこれを利用したのでついた。



ヤマトグサ

(ヤマトグサ科)

花期 5～6月

山の木陰に生え、高さは10～25cm。糸の先に垂れ下がっているのは雄しべで、風に揺れる様子は何ともいえない風情がある。和名は^{やまとぐさ}大和草で1属1種の珍しい植物である。

バッコヤナギ (ヤナギ科)

花期 5～6月

山地に生える落葉高木。葉が出るより先に花が咲くので、早春の山の中で黄色い花が目目を引く。雌雄異株で、雄花は雌花より大きく花穂の長さが2～3cmになる。



キジムシロ (バラ科)

花期 5～6月

山地にふつうに見られる多年草。葉は根生する。茎は高さ5～30cm位になる。葉は羽状複葉でふつう5～7枚の小葉からなる。枝分かれした茎の先に5枚の花弁を持つ黄色の花をつける。



ネコノメソウ (ユキノシタ科)

花期 5～6月

山地のやや湿った場所に多い多年草。全体に柔らかく、毛がない。葉は対生する。花は枝分かれした先につき、黄緑色をしている。実は2つに割れ、開いたくちばしのようなになる。



ツルミヤマシキミ

(ミカン科)

花期 5～6月

常緑の小低木で基部がほうのように伸びる。葉はやや長い楕円形で光沢がある。花は枝の先にまとまってつく。果実は丸く熟すと赤くなる。みずみずしく一見おいしそうに見えるが有毒である。



ナツグミ

(グミ科)

花期 5～6月

日当たりのよい場所に生える3～5mになる落葉低木。葉のつけねから出る長い花柄を垂らし、白い花をつける。実は楕円形で熟すと赤くなり、食べられる。

ワチガイソウ

(ナデシコ科)

花期 5～6月

林の下に生える多年草。茎は直立するが、下部で枝分かれます。花は、上部の葉の付け根から長めの柄を出しその柄の先に、ふつう一個だけ花をつける。





シロバナエンレイソウ 水ヶ塚周辺の樹林に多く生え、高さ20~40cm。
(ユリ科) 暗い林のなかで、その白い花はよく目立つ。
花期 5~6月 これに良く似たエンレンソウは、白い花びらがないので区別がつく。



ヤマシャクヤク 林や草地の比較的日当たりのよいところに生える多年草。山にある芍薬しやくやくの意味だが、現在では数が少なくなっている。通常は白色の花だが、まれに紅花のものもある。
(ボタン科)
花期 5~6月

ウワバミソウ

(イラクサ科)

花期 5～7月

山中の湿地に群生し、触れると簡単に折れてしまうほど弱い。群生するのは、秋に節がふくらみ、それが落ち新苗になる為である。和名はウワバミがいる所に生えるのでついた。

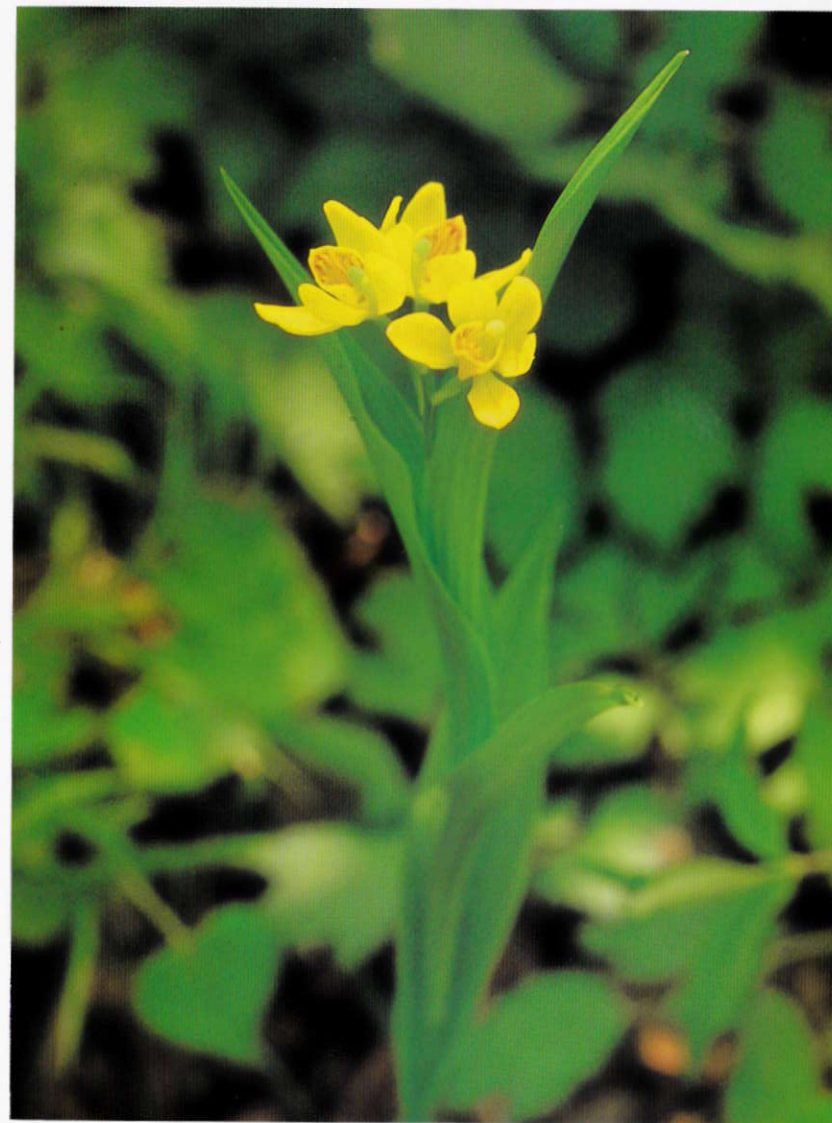


イヌガラシ

(アブラナ科)

花期 5～7月

日当たりのよい山野に群生する。花弁は黄色で長さ3cm程、果実はアブラナの実に似ている。和名は犬芥でカラシナに似ているが、食用にならないのでつけられた。



キンラン

(ラン科)

花期 5～6月

白花のギンランに対して、花の黄色を黄金色に見立てて名付けられた。林の中や草原に見られる多年草で、葉は茎を抱くようにつき、軽く反り気味に立っている。



ヤマウツボ

(ゴマノハグサ科)

花期 5～6月

林の中に生える白色の小さな草。穂のよう
にたった総状花序そうじゆうかじよにたくさんの白色の花をつ
ける。寄生植物なので、全体が白い感じがあ
る。



ササバギンラン

(ラン科)

花期 6～7月

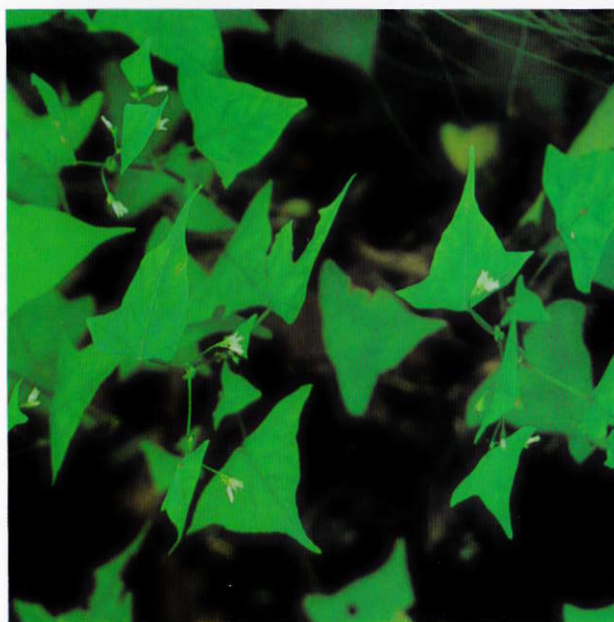
山地や丘陵の林の中に生え、その純白の花
は林の中でもよく目立つ。ギンランに似てい
るが、葉は6～8枚で互生し、花の付け根に
ある小葉が長くなるので区別される。

クワガタソウ

(ゴマノハグサ科)

花期 6～7月

本州の太平洋側のやや湿気のあるところに生え、茎は根もとで枝分かれして10～20cmになる。暗い林の中には似つかわしくない、淡紫色の可憐な花を咲かす。



ミヤマタニソバ

(タデ科)

花期 7～9月

山地の陰地に生える1年草。茎は高さ20～40cm、細長く横にはい節々で折れ曲がり、葉は三角形をしている。花は白色で、暗い林の中で咲く様子は、もの悲しげである。



コナスビ

(サクラソウ科)

花期 6～7月

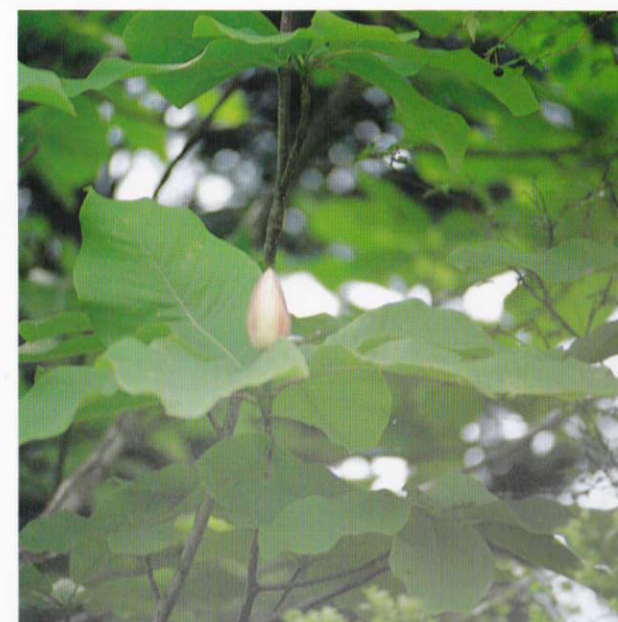
全体が小さく、花は1cmにもならない。和名は小茄子^{こなすび}で、実が下向きにつく様子がナスビに似ているのでつけられたというが、ルーペを使わなければ、とてもわからない。

ホオノキ

(モクレン科)

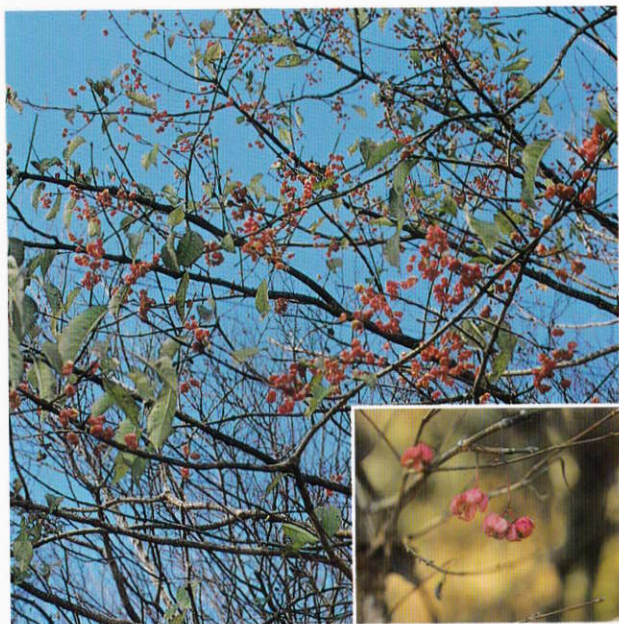
花期 6～7月

高さ30mにもなる落葉高木で、40cm位の大形の葉が林の中でもよく目立つ。葉は枝の先に放射状に通常8枚つき、中央に白色で大形の花をつける。花は芳香がある。幹は下駄の材料として有名。



マユミ
(ニシキギ科)

花期 6～7月
普通は3～5m位であるが、ときには15m位になることがある。雌雄異株で、花は房状ふさじょうに咲く。実は熟すと割れ、赤い皮に包まれた種子が現れ、たいへん美しい。



ミツバウツギ
(ミツバウツギ科)

花期 6～7月
山地に生える落葉低木。葉が3枚の小葉に分かれた複葉になっているのが特徴で、花は外側がガクで内側が花びらである。ユキノシタ科のウツギとは別の種類である。



シロバナノヘビイチゴ
(バラ科)

花期 5～7月
地下茎によって地面をはうように生えるため、赤い実をへびが食べるものと信じられて名前がつけられた。そのため実は有毒だと思われるが、実際には、無毒である。

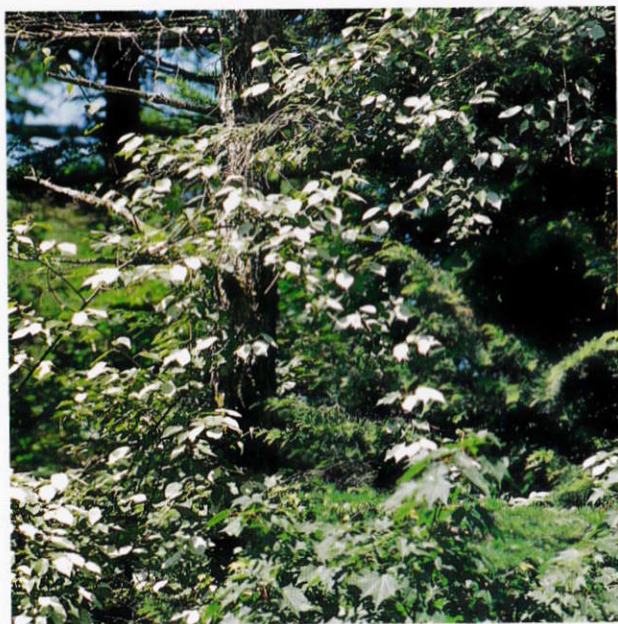
マイヅルソウ
(ユリ科)

花期 6～7月
温帯から亜高山帯に生ずる、高山を代表する植物。高さ20～25cmで根茎が長く這い、群生することが多い。和名は舞鶴草まいづるそうで、葉脈が鶴が羽根を広げた様子に似ているのでついた。



ヤマトウバナ
(シソ科)

花期 6～7月
山地の木陰に生え、
高さ10～30cm。茎はシ
ソ科の特徴で四角くな
り、その先に白い小形
の唇形花をつける。和
名は山塔花やまとうばなで花が集ま
って咲く様子を表して
いる。



ミヤマタタビ
(マタタビ科)

花期 6～7月
表富士周遊道の登山
区間に多く見られる、
つるになる植物。葉は
長さ10cmにもなり、花
の咲く頃から、上半部
が白～桃色に変色する
ので、すぐに見つける
ことができる。



タケシマラン
(ユリ科)

花期 6～7月
実 8月
林の中で見られる多
年草。茎は高さ20～40cm
位になり、二又に分か
れるものが多い。花は
淡紅色でぶらさがって
つく。液果は球形で直
径7mm位になり、熟す
と赤くなる。

ツバメオモト
(メギ科)

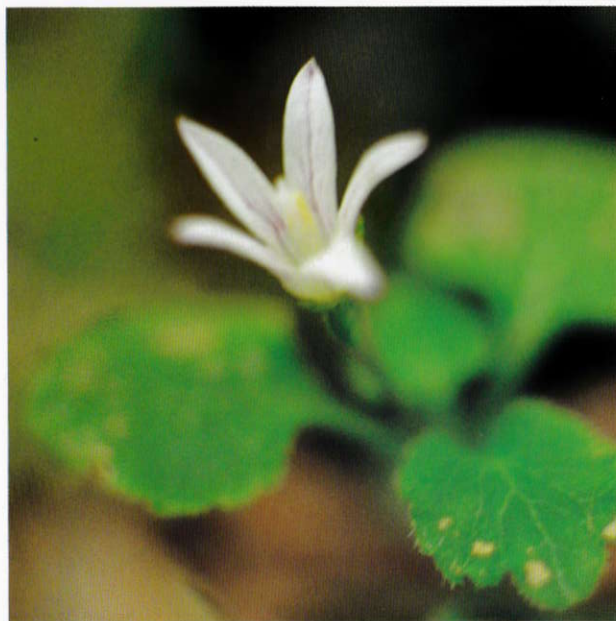
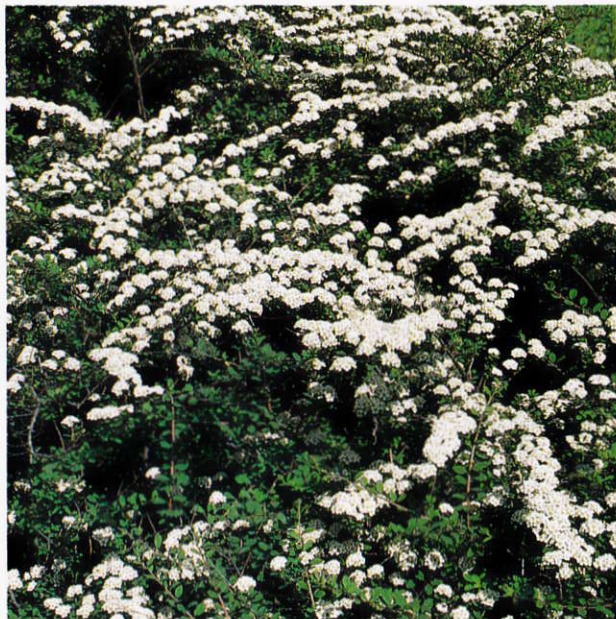
花期 6～8月
亜高山帯の針葉樹林
に生え、葉はオモトに
似ていて2～5枚が根
もとにつく。白色で小
さな花を数個つけ、果
実は初めは美しいルリ
色であるが熟すと黒色
になる。



イワシモツケ (バラ科)

花期 6～8月

日当たりのよい岩場に生える落葉低木。高さ1～2mで、枝先に白い小花を集めて咲かせる。水ヶ塚の奥には群落があり、あたり一面を白く埋め尽くす様子は幻想的である。



タニギキョウ (キキョウ科)

花期 6～8月

うす暗い林の中にひっそりと生え、全体が小さく弱々しい感じがする。地下茎が細長くのび、高さ10cmほどで茎の先端にかわいい鐘形つぼみの白い花を上向きにつける。



イチヤクソウ (イチヤクソウ科)

花期 6～8月

光沢のある葉が根もとにつき、3～10個の白い花を咲かせる。暗い林の中に生える様子は、可憐という言葉がぴったりする。和名はいちやくそう一葉草で薬用になることから名づけられた。

オククルマムグラ

(アカネ科)

花期 6～8月

山の湿った林内に生え、葉は普通6枚輪生し先はとがらないのが特徴。花は白色で3mmほど、果実には長いカギ形の毛がある。和名はおくくるまむぐらで6枚の葉を車輪にみたてている。



ヒメシヤラ

(ツバキ科)

花期 7～8月

赤褐色の樹肌が林の中で一際目立つ落葉高木。幹は表面がすべすべして、別名サルスベリともいわれる。葉の付け根に2～3cm位の白い花をつける。



ズダヤクシュ

(ユキノシタ科)

花期 6～8月

茎の先に白色の小さな花を斜め下向きにつける。写真は果実である。和名は喘息ぜんそく種で長野では喘息をズダといい、喘息に効くというのでつけられたという。



バイケイソウ

(ユリ科)

花期 6～8月

温帯～亜高山帯の湿った林に生え、高さ1～1.5mになる多年草。雄花と雌花があり緑白色で2cmほどの花を多数つける。根茎は毒性が強いので、農業用殺虫剤として使われた。



サワギク

(バラ科)

花期 6～8月

湿り気が多い林の中に生える。葉は薄く羽状に切れ込んでいる。根元から出る葉は白い毛が密生するが茎の葉は毛が少ない。黄色い小さな花を散房状さんぼうじょうにつける。



ツルシロカネソウ 横にはう地下茎があり、そのためにしばしば群生してみえる。葉や茎には毛がなく、茎につく葉は対生する。花は白色で5枚の萼片を持ち、林の中では可憐な感じを与える。

(キンポウゲ科)
花期 6～8月

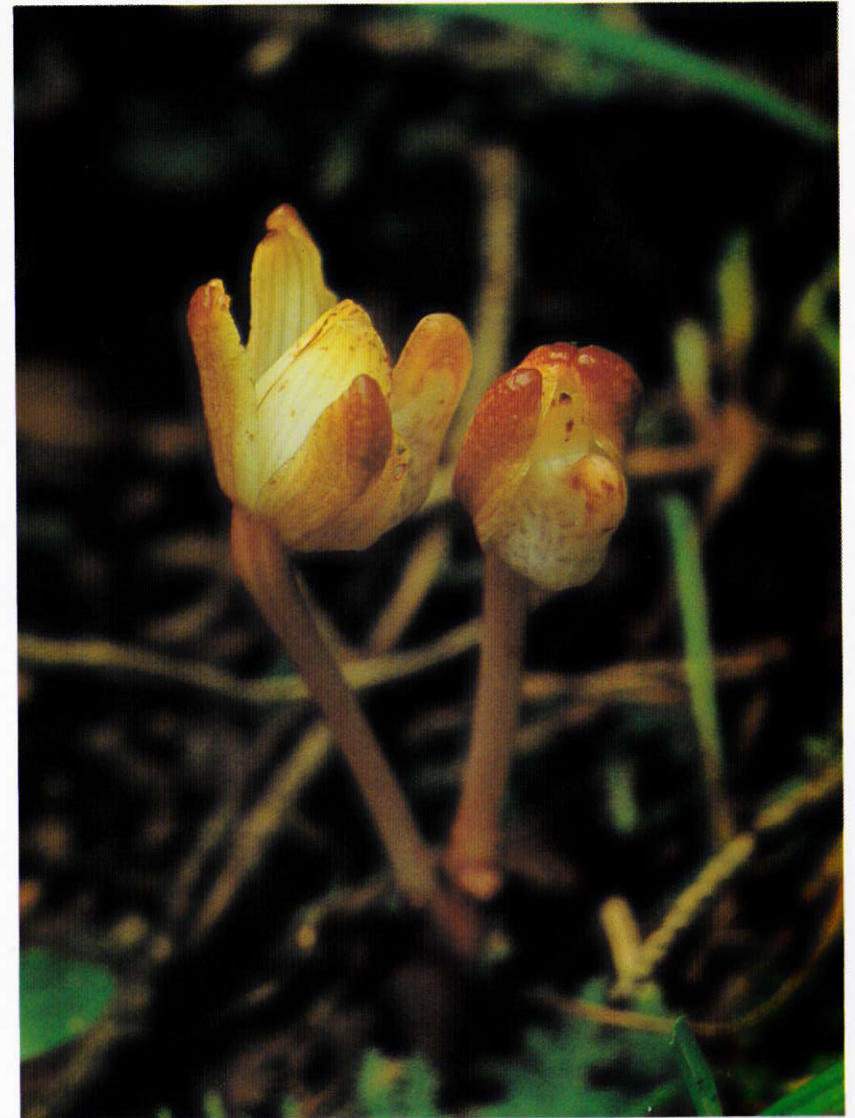


ウツボグサ 日当たりのよい草地や道端などに多い多年草。花穂が弓矢を入れるうつぼかぼ(椀)に似ているためにこの名がついた。花穂は松かさ状で、花が終わって枯れると黒く変色する。

(シソ科)
花期 6～8月



イワセントウソウ 無毛の小さい多年草で、林の中に生える。
(セリ科) 高さは10~25cm位。根元から出る葉は羽状に
切れ込みがあって、ニンジンの葉に似ている。
花期 7~8月 枝の先に小さな白い花をつける。



キバナショウキラン ブナ帯の落葉樹林の下やササの中に生える
(ラン科) 腐生植物。高さは20~50cm位になり上部に10
個前後の花をつける。全体が黄褐色を帯び、
花期 7~8月 花も黄褐色で、長い花柄をもつ。

ツマトリソウ

(サクラソウ科)

花期 7～8月

草地や林の縁で見られる。葉は茎の上部に輪生状につく。上部の葉の付け根から花柄を伸ばし、ふつう1個の花をつける。花冠裂片かかんれっぺんの先が赤くつまどるのでこの名がついたといわれる。



イケマ

(ガガイモ科)

花期 7～8月

つる性の植物で太い根茎があり、長い花柄の先に5mm程の白い小花を多数咲かせる。茎を切ると白い乳液が出る。これとよく似たガガイモは花の色が淡紫色なので区別できる。



ハコネラン

(ラン科)

花期 7～8月

深山の針葉樹林に生える珍しいラン。葉は1枚で、長さ10～20cmの花茎をのぼし、白味がかかった淡黄色の小花を数個つける。和名は箱根蘭はこねらんで箱根で発見されたことによる。



タケニグサ

(ケシ科)

花期 7～8月

山野の日当たりのよい荒地に多く生える。高さ1～2mで、葉の裏には細かい毛を多くつける。茎を折ると橙黄色の汁を出すことはよく知られているが、有毒なので要注意。



カワラマツバ

(アカネ科)

花期 7～8月

日当たりのよい乾いた草原に生え、高さ30～80cm。和名は河原松葉であるが、河原だけでなく野や山の草地にも多く、葉が細く松の葉に似ているのでつけられた。



ウバユリ

(ユリ科)

花期 7～8月

花が咲くころに、根もとの葉が枯れてなくなることから、姥百合うばゆりとつuitaといわれる。しかし、葉が枯れないことも多く姥百合とよぶのは少し可愛そうな気がする。



コキンレイカ

(オミナエシ科)

花期 7～8月

山地の岩場に生え、高さ20～60cm、高山では15cm程になる。花は鮮やかな黄色で、2～3mmきよの距（花びらの一部が筒状になる）があるのが特徴。



ホソバノキソチドリ 亜高山帯の日当たりの良い草地に生え、茎は細く高さ20~50cm。花は淡い黄緑色で密につき、乾くと暗色になる。和名は細葉木曾千鳥ほそばきそちどりで、木曾で発見されたことによる。

(ラン科)
花期 7~8月



ミヤマムグラ 深山の木陰に生え、高さ10~25cm。花は白く十字形をしている。茎の上部では、葉が4枚つくが、そのうち2枚は他の2枚より大きくなっている不思議な作りをしている。

(アカネ科)
花期 7~8月



マルバダケブキ

(キク科)

花期 7～8月

比較的日の当たる場所に生える。根元から出る葉は大形で丸く、フキの葉に似ている。丸葉岳蓐(まるばだけふき)が名前の由来である。花茎を高く伸ばしてオレンジ色の花をつけるのでよく目立つ。



ホザキチヨウラン

(ラン科)

花期 7～8月

ブナ帯の林のなかに自生するランの仲間。ふつう卵形の葉を1枚だけつける。葉の基部は鞘さやとなって、茎を包んでいる。花は淡緑色で花茎に穂のようにやや密につく。

コバノイチヤクソウ

(イチヤクソウ科)

花期 7～8月

半日陰の場所に生える常緑の多年草。イチヤクソウに比べ、葉が一回り小さく全体も小さい感じを受ける。花は白色で高さ10～15cm位の花茎に3～7個の白色の花をつける。



シデシャジン

(キキョウ科)

花期 7～8月

花は鮮やかな青紫色で、特徴のある作りをしている。富士山でもそれほど数は多くは見られない。キキョウ科は合弁花なのに、離弁花のように見える不思議な花である。

アオスズラン

(ラン科)

花期 7～8月

林の下にはえる。全体に褐色の短い縮毛がある。細長い葉を5～7枚つける。花は緑色を帯び、カキランより多い20～30個の花をつける。

レンゲショウマ

(キンポウゲ科)

花期 7～8月

日本の特産で1属1種の珍しい植物。花びらのように見えるのはガクで、中が本当の花びらである。暗い林の中で咲く透明感のある淡紫色の花は、神秘的な感じさえする。



ツクバネソウ

(アカバナ科)

花期 7～8月

深山の林内に生え、高さ15～40cm。茎の先端に4枚の葉を輪生し葉の先に淡黄緑色の花を1個つける。和名はつくばねそう衝羽根草で、葉が正月の羽根つきの羽根に似ているのでついた。



タニタデ

(アカバナ科)

花期 7～8月

山地の林下に生え、高さ20～50cm。節が赤味を帯びるのが特徴。花卉・がく片とも2枚で不思議な作りをしている。和名は谷蓼たにたでで谷に生え葉の形がタデに似ていることによる。



コバギボウシ

(ユリ科)

花期 7～8月

山野の湿地に生え、表富士周遊道のまわりでもよく見かける。葉は光沢が無く表面の葉脈は5～7本、花茎は30～60cmになる。花は淡紫色で内側に紫色の脈があるのが特徴。



ミヤマニンジン

(セリ科)

花期 7～8月

関東・中部の日当たりの良い高山帯と亜高山帯に生える。高さ10～40cmで横にはう地下茎があり、葉は柔らかく細かく裂けている。富士山は分布の南限である。



ヤマノコギリソウ

(キク科)

花期 7～8月

日当たりのよい草地などに生える多年草。その名の通りのこぎりのような葉が特徴である。茎の高さは50～100cm位になる。枝分かれした先に7～9mm程の白色または淡紅色の花をつける。

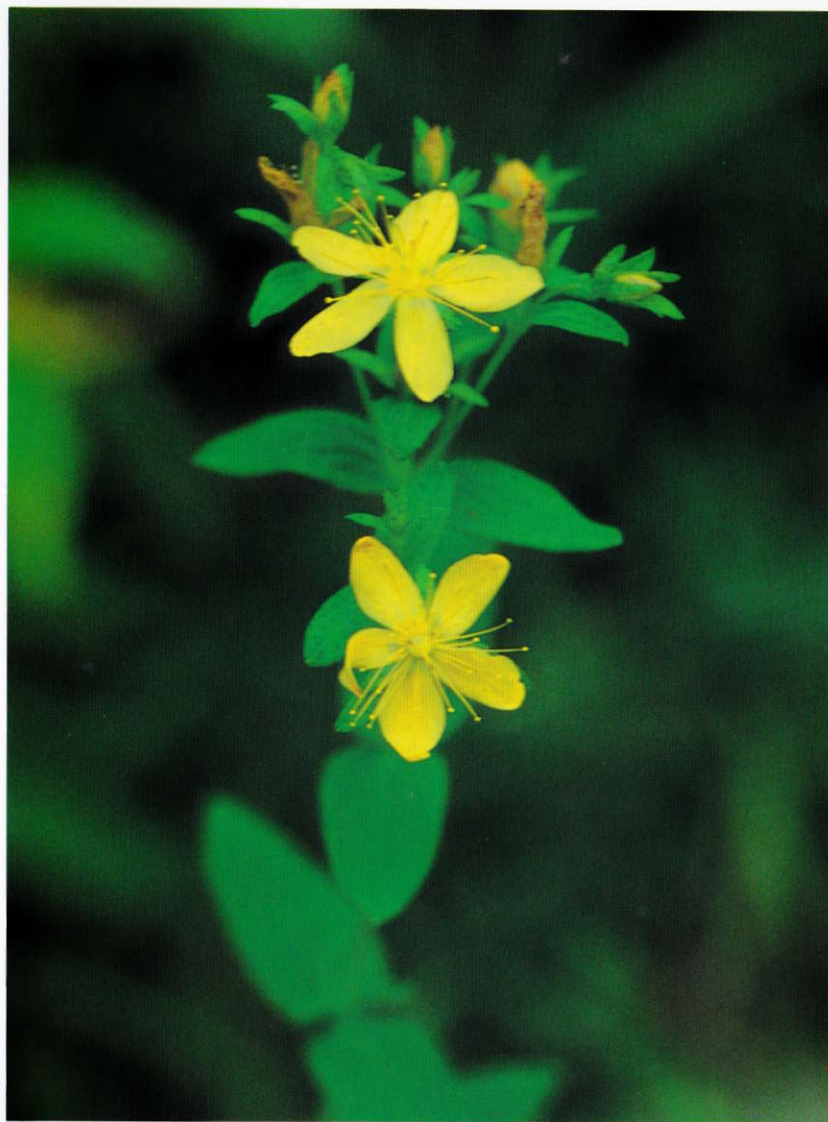


ハンゴンソウ

(キク科)

花期 7～8月

湿った草地に生える大形の多年草。葉は大きく切れ込みがあり、茎の先に冠状にたくさん黄色い花をつける。水ヶ塚周辺の寄生火山の火口跡でたくさん見ることができる。



フジオトギリソウ 山地のやや日当たりのよい場所に生える多年草。オトギリソウの変種。高さは30~40cmでややオトギリソウより小さい。花柱が子房より長い。富士・御坂秩父山地に多く見られる。



カニコウモリ 林の中でふつうに見られる。葉がカニの甲羅に似ていることから名付けられた。葉のまわりには小さなギザギザがある。花は筒状で白い。

キツリフネ

(ツリフネソウ科)

花期 7～8月

黄色いツリフネソウの意味。茎はみずみずしく、毛がない。山地にふつうに見られるがツリフネソウよりは少ない。実はホウセンカのように、弾けて種子を飛ばす。



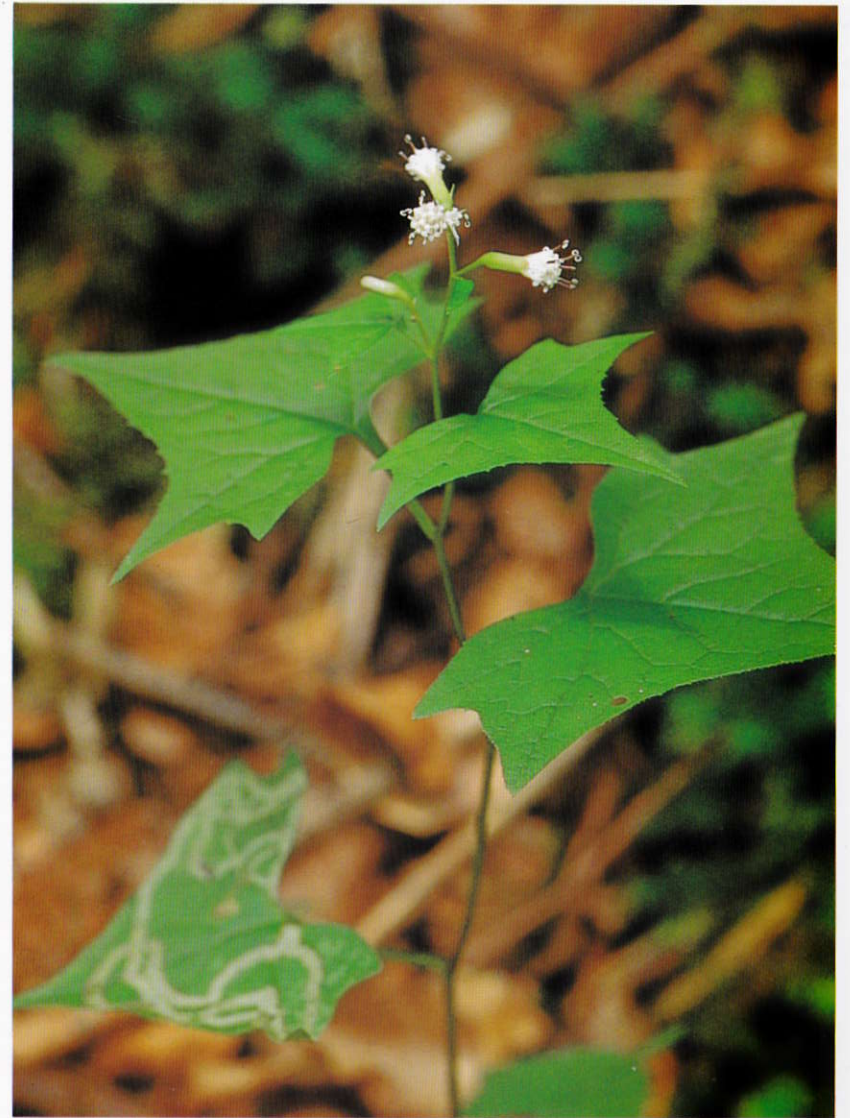
ルドベッキア

(アラゲハンゴンソウ)

(キク科)

花期 6～10月

北アメリカ原産の帰化植物。比較的日当たりのよい草原などに生える。全体に剛毛がある。高さは1mを超えない。根元から出る葉は広い倒披針形で長い葉柄を持っている。



コウモリソウ

(キク科)

花期 7～9月

関東から近畿の深山の湿り気のある林の下に生える。高さは30～70cmで、葉の形がコウモリが翼を広げた姿に似るのでつけられた名前。花は6～10個の筒状花が集まっている。



フシグロセンノウ 山地の林下に生え、高さ40~90cm。鮮やかな朱赤色の大きな花は遠くからでも目立ち、強い印象を与える花である。節は太く紫黒色になるのでこの名がついた。

(ナデシコ科)
花期 7~9月



キオン 茎は太く直立し、高さ1mほどになる。茎の先に黄色い花をたくさん咲かせるので、よく目立つ。これと似たハンゴンソウは葉が3~7に深く裂けるので区別できる。

(キク科)
花期 8~9月

トモエシオガマ

(ゴマノハグサ科)

花期 8～9月

高山帯の日当たりのよい草地に生え、高さ30～60cm。淡紅色の花が茎の先端に集まり、上から見ると風車のようともえがたに巴形に咲くので、この名がついた。シオガマガキクの変種である。



ナガバノコウヤボウキ

(キク科)

花期 8～9月

山野に生える落葉低木。高さ1mほどで、キク科にしては大型である。花は白色の筒状花で、葉の中央に1個咲く。和名は長葉高野ながばのこうや筈で高野山ではこの枝で筈を作ることによる。



メボタンヅル

(キンポウゲ科)

花期 8～9月

日当たりのよい山野に生える木質のつる性植物。センニンソウと似ているが、葉が3枚の小葉に分かれるので区別できる。和名は女め牡丹蔓で、牡丹蔓より小さいのでつけられる。

ヤマハハコ

(キク科)

花期 8～9月

本州中部地方より北の日当たりのよい山地や高原に生える。若いときは葉の表面に綿毛があるが、成長するとなくなつてつやのある緑色になる。正式な和名はヤマホオコ。





ハナイカリ

(リンドウ科)

花期 8～9月

日当たりのよい草地に生える1～2年草。花は短い柄があって、色はうすい黄色、後に緑色を帯びるようになる。花全体の形が船の錨いかりに似ていることからこの名がついた。



タチコゴメグサ

(ゴマノハグサ科)

花期 8～9月

日当たりの良い山の草地に生える。茎の先の小さな花は、花びらに紫のすじ、黄色の斑たちこ点があり繊細な作りをしている。名前は立たちこ米草こめぐさで花の小さい様子からつけられた。

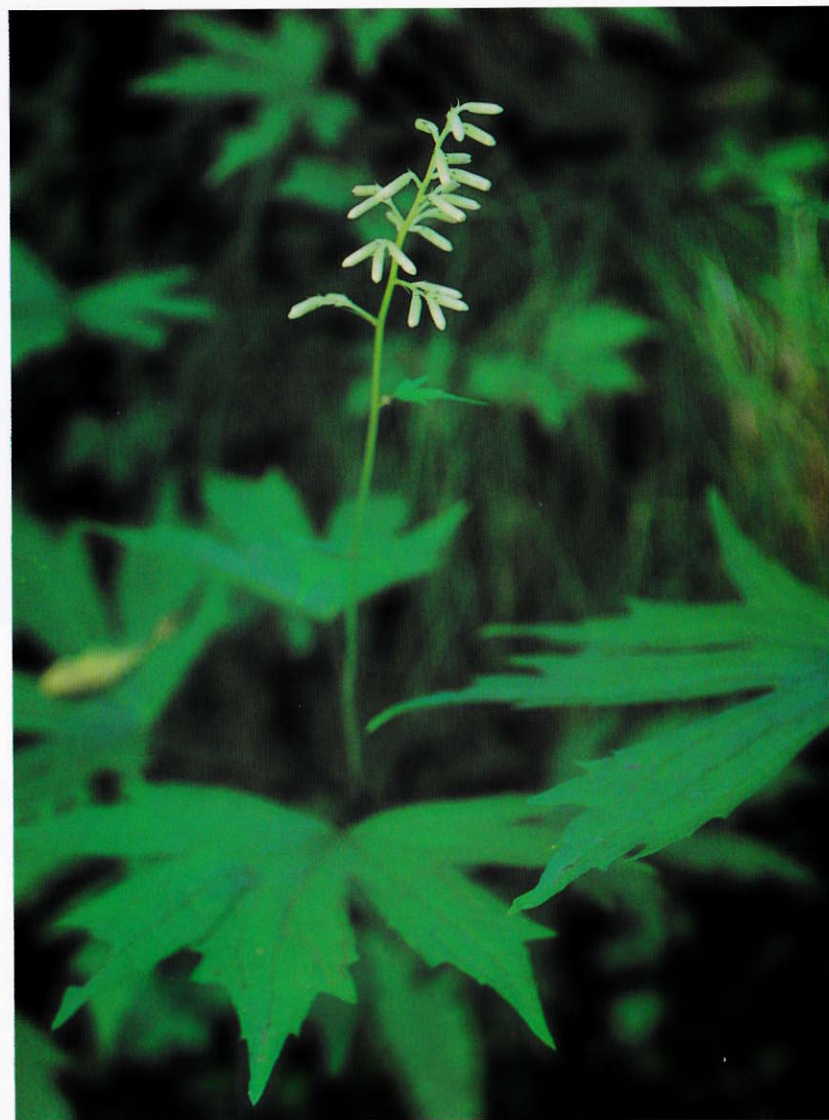


ノブキ

(キク科)

花期 8～9月

林の中に生え、根茎を持つ多年草。葉はフキに似ているが、茎が1m位になる。茎の先に白色の小さな頭花をつける。実は繊毛があり、衣服にくっつきやすい。



モミジガサ

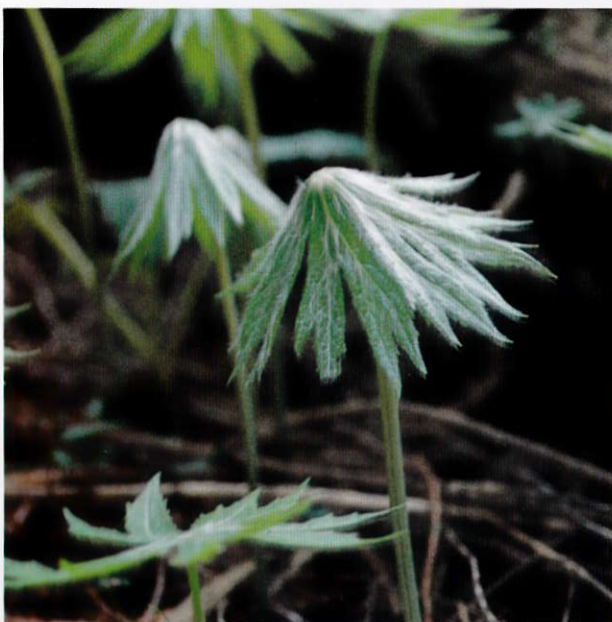
(キク科)

花期 8～9月

山地の湿った木陰にはえる多年草。葉には5～7の深い切れ込みがあり、全体の形がモミジに似ているのでこの名がついた。茎の先に筒状の多数の頭花とうかをつける。

クサコアカソ (イラクサ科)

花期 7～9月
やや湿った場所に生える多年草。茎と葉柄が赤褐色を帯び、毛は少ない。葉は対生し、全体は卵形で先がとがっている。雌雄異株で花穂は上方の葉の付け根につき、雌花は赤色を帯びる。



ヤブレガサ (キク科)

花期 8～9月
林の中に生える多年草。春地中から芽を出すときの様子が傘に似ていることと、葉に大きな切れ込みがあり、それが傘が破れたように見えるところから名付けられた。白色で筒状になった花をつける。

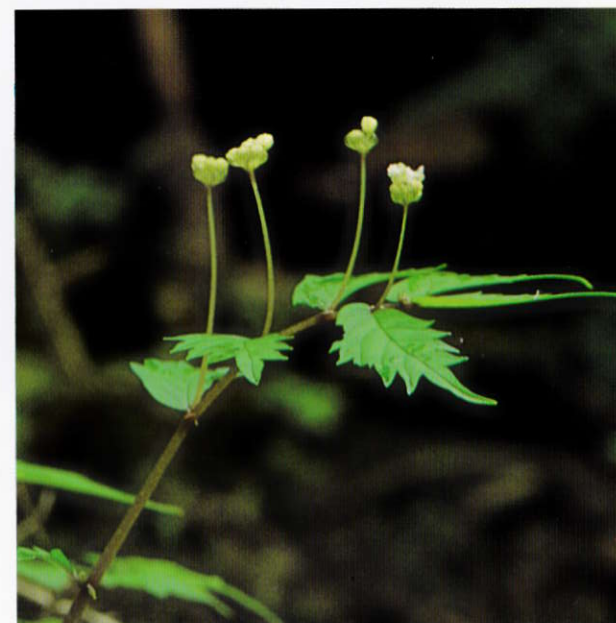


シロヨメナ (キク科)

花期 9～10月
日当たりのよい草原に生え、高さ0.6～1mになる。全体に毛は少なく、花は白色でわずかに紫色になることもある。和名は白嫁菜しろよめなで花が白い様子からつけられた。

ヤマミズ (イラクサ科)

花期 8～9月
暗い林の中に生える軟らかい1年草。葉のつけねから驚くほど細い花茎を伸ばし、その先に雄花・雌花を一緒につける。何とも奇妙な作りをしている植物である。





イヌヤマハッカ 山の木陰に生え高さ60~80cm、茎はシソ科
(シソ科) なので四角く、枝先に長い花穂を出し、青紫
色の花を多数つける。ハッカという名
前がつくが、香気はまったくない。



アケボノソウ やや湿った場所に生える1年草。根元から
(リンドウ科) 出る葉はやや大きめの長楕円形だが、花が咲
く頃にはなくなってしまふ。花に見られる緑
色の斑点を夜明けの空に見立て、曙草あけぼのそうと名付
けられた。



フユノハナワラビ シダ植物で、山野の日当たりのよい草地に生える。葉より胞子をつけた胞子葉ほうししょうがはるか
(ハナワラビ科) に長く、胞子が10月ごろ熟するので、フユノ
完熟期 10~12月 ハナワラビとよばれている。

さ く い ん

ア	アオスズラン……………53	サ	サワギク……………37
	アケボノソウ……………75	シ	シデシャジン……………52
イ	イケマ……………42		シロバナエンレイソウ……………20
	イチヤクソウ……………33		シロバナノヘビイチゴ……………29
	イヌガラシ……………22		シロヨメナ……………73
	イヌヤマハッカ……………74	ス	ズダヤクシュ……………35
	イワシモツケ……………32	タ	タケシマラン……………31
	イワセントウソウ……………40		タケニグサ……………44
ウ	ウツボグサ……………39		タチコゴメグサ……………69
	ウバユリ……………46		タニギキョウ……………32
	ウワバミソウ……………22		タニタデ……………55
オ	オククルマムグラ……………34	ツ	ツクバネソウ……………54
カ	カニコウモリ……………61		ツバメオモト……………31
	カワラマツバ……………45		ツマトリソウ……………42
キ	キオン……………65		ツルシロカネソウ……………38
	キジムシロ……………16		ツルミヤマシキミ……………18
	キツリフネ……………62	ト	トモエシオガマ……………66
	キバナショウキラン……………41	ナ	ナガバノコウヤボウキ……………66
	キンラン……………23		ナツグミ……………19
ク	クサコアカソ……………72	ニ	ニワトコ……………14
	クロモジ……………12	ネ	ネコノメソウ……………17
	クワガタソウ……………26	ノ	ノブキ……………70
コ	コウモリソウ……………63	ハ	ハコネラン……………43
	コキンレイカ……………47		ハタザオ……………13
	コナスビ……………27		ハナイカリ……………68
	コバギボウシ……………56		ハンゴンソウ……………59
	コバノイチヤクソウ……………52		バイケイソウ……………36
サ	ササバギンラン……………25		バッコヤナギ……………16

ヒ	ヒメシャラ	34	ミ	ミヤマムグラ	49
フ	フジオトギリソウ	60	メ	メギ	14
	フシグロセンノウ	64		メボタンヅル	67
	フユノハナワラビ	76	モ	モミジガサ	71
ホ	ホオノキ	27	ヤ	ヤブレガサ	72
	ホザキイチョウラン	51		ヤマウツボ	24
	ホソバノキソチドリ	48		ヤマシャクヤク	21
マ	マイヅルソウ	29		ヤマトウバナ	30
	マユミ	28		ヤマトグサ	15
	マルバダケブキ	50		ヤマノコギリソウ	58
ミ	ミツバウツギ	28		ヤマハハコ	67
	ミツマタ	12		ヤマミズ	73
	ミヤマタニソバ	26	ル	ルドベッキア	62
	ミヤマニンジン	57	レ	レンゲショウマ	54
	ミヤママタタビ	30	ワ	ワチガイソウ	19

あ と が き

「富士山麓の植物」第2集は水ヶ塚を中心として黒塚、東白塚、西白塚、高鉢周辺海拔1,000mから1,600m位に的を絞って写真撮影をしました。

平成6年の夏は暑かった。高山での涼を求めての撮影は困難をきわめました。しかし、高山で咲く可憐な草花も力強くたくましさを持って生き続けている姿を見ると心暖まる思いが致します。

春遅く冬早い山麓の植物群、2集は植物が少し少ないが普段あまり目にする機会がない草花があると思います。

次回第3集は、いよいよ富士山頂へと向かい準備を進めていきたいと思いますが今回の企画、取材、解説の作成へと各調査員の皆様には深く感謝致します。また静岡市にお住まいの大村敏朗様（日本植物学会終身会員）には格別の御指導を賜り厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 静岡県植物誌
杉本 順一著 第1法規
- 原色日本植物図鑑
北村 四郎、村田 源
堀 勝著 保育社
- 原色牧野植物大図鑑
牧野富太郎著 北隆館

調査員

執筆調査員

- 渡辺 宏行 裾野市立千福が丘小学校教頭
 - 大森 紀行 裾野市立向田小学校教諭
 - 山本 康史 裾野市立西中学校教諭
- #### 写真取材調査員
- 飯塚 勉 元裾野市社会教育指導員
 - 渡辺 政治 元裾野市社会教育指導員
 - 滝 道雄 日本野鳥の会東富士支部会員
 - 井上 輝夫 裾野市立富士山資料館学芸員
 - 杉山 義則 裾野市立富士山資料館指導員

編集 平成7年3月

発行 裾野市立富士山資料館
裾野市須山2255-39

印刷 みどり美術印刷株式会社

館長 渡辺 徳逸

井上 輝夫 杉山 義則

杉山 末雄 渡辺 節代